



学ぶ力

学びナビ

筆者との対話

主張に対する自分の立場を明確にして読む

説明的な文章の読み方として、『ガイアの知性』では、主張につながる推論を捉えることを学習しました。推論を重ねた筆者の主張を捉え、自分の知識や経験と結びつけながら読み深めました。

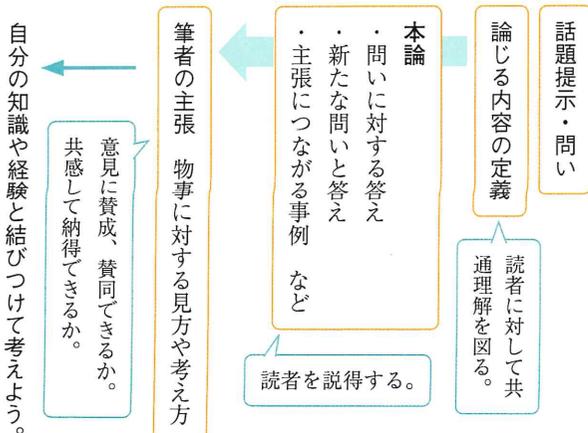
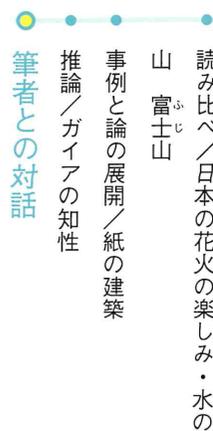
説明的な文章を読むときには、読者は、このように自分の知識や経験と照らし合わせながら、筆者のあげる事例の適切さや、事例が主張とどのように結びついているかなどを考え、筆者と対話するように読んでいきます。

中でも、物事に対する見方や考え方について論じる文章においては、筆者の意見に賛成、賛同するように主張し、読者を説得するように書かれることがあります。

筆者の意見や主張に対して賛成、賛同したり、共感して納得したりすることができるか、自分の立場を明確にして読み進めましょう。

目標

- 筆者の述べる事実と主張の関係を捉える。
- 構成や表現に着目し、理解したことや考えたことを自分の知識や経験と関連つけて広げたり深めたりする。



10 5

説得させる表現

説明的な文章を読むときは、今、何について論じているのか、筆者と読者との間で共通理解を図る必要があります。そこで筆者は、物事を説明したり、言葉をかえて説明し直したりすることで、論じる内容や言葉の定義を示します。筆者は、読者が、自分自身の経験や知識に照らし合わせやすいようにしているのです。

また、言葉の定義をしている場合、国語辞典などでの一般的な意味や説明だけでなく、定義そのものに筆者の考えや問題意識がこめられていることもあります。取り上げられている言葉の、文章の中で指し示している意味は何であるかを捉えて読みましょう。

さらに、説得力を感じさせるような表現の特徴もおさえましょう。その述べ方から、筆者が読者をどのように説得しようとしているかが見えてきます。

- ・ 同じ言葉や類似した表現を繰り返し返している。
 - ・ 読者に呼びかけるように書いている。
 - ・ 内容をまとめたりごとに分けて並べるなど、整理して伝えている。
- など

『学ぶ力』でも、筆者の述べ方をおさえながら、主張に対して自分の考えをもつて読んでいきましょう。

『学ぶ力』では、筆者が力強く語りかけてくるところが、まるで「筆者と対話している」ように感じられるね。



ヒント

- 筆者の表現の特徴を捉え、意見や主張の述べ方に着目してみよう。
- 筆者の意見や主張に対する自分の立場を明確にし、納得できるときを考えてみよう。



学ぶ力

うちだ たつる
内田 樹

日本の子どもたちの学力が低下していると言われることがあります。そんなことを言われるといい気分がしないでしょう。私が、中学生だとしても、新聞記事やテレビのニュースでそのようなことを聞かされたら、おもしろくありません。しかし、この機会に、少しだけ気を鎮めて、「学力が低下した」とはどういうことなのか、考えてみましょう。

そもそも、低下したとされている「学力」とは、何をさしているのでしょうか。「学力って、試験の点数のことでしょう。」と答える人が、ほとんどだと思います。本当にそうでしょうか。「学力」とは「試験の点数」のことなのでしょうか。私はそうは思いません。試験の点数は数値です。数値ならば、他の人と比べたり、個人の経年変化をみたりするうえで参考になります。でも、学力とはそのような数値だけで捉えるものではありません。「学力」という言葉をよく見てください。訓読みをしたら「学ぶ力」になります。私は学力を「学ぶことができる

10

5

意
学力

力、「学べる力」として捉えるべきだと考えています。数値として示して、他人と比較したり、順位をつけたりするものではない。私はそう思います。

例えば、ここに「消化力」が強い人がいるとしましょう。ご飯をおなかいっぱいに詰め込んでも、食休みもしないで、すぐに次の活動に取りかかれる人はまちがいなく「消化力が強い」といえます。「消化力が強いです。」と人にも自慢できます。しかし、それを点数化して他人と比べたりしようとはしないはずです。「睡眠力」や、「自然治癒力」というものも、同様のものだと思います。どんなときでもベッドに潜り込んだら、数秒で熟睡状態に入れる人は「睡眠力が高い」といえるでしょう。この力は健康維持のためにもストレスを軽減するうえでも、きわだつて有用ですが、睡眠力を他人と比較して自慢したり、順位をつけたりすることは普通しません。けがをしてもすぐに傷口が塞がってしまう自然治癒力も生きるうえでは、おそらく学力以上に重要な力でしょうが、その力も他人と比較するものではありません。私は「学力」もそういう能力と同じものではないかと思うのです。

「学ぶ力」は他人と比べるものではなく、個人的なものだと思います。「学ぶ」ということに對して、どれくらい集中し、夢中になれるか、その強度や深度を評するためにこそ「学力」という言葉を用いるべきではないでしょうか。そして、それは消化力や睡眠力と同じように、「昨日の自分と比べたとき」の変化が問題なのだと思います。昨日よりも消化がいいか、一週間前よりも寝つきがよいか、一年前よりも傷の治りが早いかなど、その時間的変化を点検したときに初めて、自分の身に「何か」が起きていることがわかります。もし「力」が伸びているなら、

15

10

5

同 対 意
強度 有用 きわだつ

▼ 塞
▼ 維
▼ 潜

それは今の生き方が正しいということですし、「力」が落ちていけば、それは今の生き方のどこかに問題があるということですよ。

人間が生きていくために本当に必要な「力」についての情報は、他人と比較したときの優劣ではなく、「昨日の自分」と比べたときの「力」の変化についての情報なのです。そのことをあまりに多くの人が忘れてしまうので、ここに声を大にして言っておきたいと思います。自分の「力」の微細な変化まで感知されているかぎり、私たちは自分の生き方の適不適を判定し、修正を加えることができます。

「学ぶ力」も、そのような時間的変化のうちにおいてのみ、意味をもつ指標だと私は思います。そのうえで「学ぶ力」とはどういう条件で「伸びる」ものなのか、具体的にみてみましょう。

「学ぶ力が伸びる」ための第一の条件は、自分には「まだまだ学ばなければならないことがたくさんある」という「学び足りなさ」の自覚があること。「無知の自覚」といつてもよい。これが第一です。

「私はもう知るべきことはみな知っているので、これ以上学ぶことはない。」と知っている人には「学ぶ力」がありません。このような人が、本来の意味での「学力がない人」だと私は思っています。物事に興味や関心を示さず、人の話に耳を傾けないような人は、どんなに社会的な地位が高くても、有名な人であっても「学力のない人」です。

第二の条件は、教えてくれる「師（先生）」を自ら見つけようとする事。

学ぶべきことがあるのはわかっているのだけれど、誰に教わったらいいのかわからない、と

▼劣

類
文
考
微細
……においてのみ
条件

いう人は残念ながら「学力がない」人です。いくら意欲があっても、これができないと学びは始まりません。

ここでいう「師」とは、別に学校の先生である必要はありません。書物を読んで、「あ、この人を師匠ししやうと呼ぼう。」と思って、会ったことのない人を「師」に見立てることも可能です（だから、会っても言葉が通じない外国の人だって、亡なくなった人だって、「師」にしているのです）。街行く人の中に、ふとそのたたずまいに「何か光るもの」があるとされた人を、瞬間的に「師」に見立てて、その人から学ぶということでも、もちろんかまいません。生きて暮らしていれば、いたるところに師あり、ということになります。ただし、そのためには日頃からいつもアンテナの感度を上げて、「師を求めるセンサー」を機能させていることが必要です。

第三の条件、それは「教えてくれる人を『その気』にさせること」です。

こちらには学ぶ気がある。師には「教えるべき何か」があるとします。条件が二つそろいました。しかし、それだけでは学びは起動しません。もう一つ、師が「教える気」になる必要があります。昔から、師弟関係を描いた物語には、必ず「入門」をめぐるエピソードがあります。何か（武芸の奥義おうぎなど）を学びたいと思っていた者が、達人に弟子入りしようとするのですが、「だめだ。」とすげなく断られる。それでも諦めずについていて、さまざまな試練の末に、それでもどうしても教わりたい、という気持ちが本気であるということが伝わると、「しかたがない。弟子にしてやろう。」ということになる。そのような話は数多くあります。

では、どのようにしたら人は「大切なことを教えてもいい」という気になるのでしょうか。

▼
匠

文 文
もちろん
ただし

例えば「先生、これだけ払うから、その分教えてください。」といって札束を積み上げるような者は、普通弟子にしてもらえません。師を利益誘導したり、おだてたりしてもだめです。だいたい、金銭で態度が変わったり、ちやほやされると舞い上がったたりするような人間は「師」として尊敬する気にこちらのほうがなれません。

師を教える気にさせるのは、「お願いします。」という弟子のまっすぐな気持ち、師を見上げる真剣なまなざしだけです。これはあらゆる「弟子入り物語」に共通するパターンです。このとき、弟子の側の才能や経験などは、問題になりません。なまじ経験があつて、「私はこのようなことを、こういうふうな方法で習いたい。」というような注文を師に向かつてつけるようなことをしたら、これもやはり弟子にはしてもらえません。それよりは、真っ白な状態がいい。まだ何も書いてないところに、白い紙に黒々と墨の跡を残すように、どんなこともどんどん吸収するような、学ぶ側の「無垢さ」、師の教えることはなんでも受け入れますという「開放性」、それが「師をその気にさせる」ための力であり、弟子のかまえてです。たとえ、書物の中の実際に会うことができない師に対しても、この関係は同様です。同じ本を読んでいても、教えてもらえる人と、もらえない人がいるのです。

「学ぶ（ことができる）力が伸びる」ために必要なのは、この三つです。繰り返します。

第一に、「自分は学ばなければならぬ」という己の無知についての痛切な自覚があること。
第二に、「あ、この人が私の師だ。」と直感できること。

第三に、その「師」を教える気にさせるひろびろとした開放性。

▼ 墨



内田 樹「一九五〇—」

東京都に生まれた。思想家。

著書に『寝ながら学べる構造主義』『下流志向』『日本辺境論』などがある。

《出典》本書のために書きおろしたものである。

この三つの条件を一言で言い表すと、「私は学びたいのです。先生、どうか教えてください。」というセンテンスになります。数値で表せる成績や点数などの問題ではなく、たったこれだけの言葉。これが私の考える「学力」です。このセンテンスを素直に、はっきりと口に出せる人は、もうその段階で「学力のある人」です。

逆に、どれほど知識があろうと、技術があろうと、これを口にできない人は「学力がない人」です。それは英語ができないとか、数式を知らないとか、そういうことではありません。

「学びたいのです。先生、教えてください。」という簡単な言葉を口にしようとしなさい。その言葉を口にすると、とても「損をした」ような気分になるので、できることなら、一生そんな台詞は言わずにすませたい。誰かにものを頼むなんて「借り」ができるみたいで嫌だ。そのように思う自分を「プライドが高い」とか「気骨がある」と思っている。それが「学力低下」という事態の本質だろうと私は思っています。

自分の「学ぶ力」をどう伸ばすか、その答えはもうお示ししました。皆さんの健闘を祈ります。

センテンス
文。文章。

千 みちしるべ

内容を捉えよう

① 文章の構成について、キーワードを抜き出し、内容のまとめごとに矢印や線を用いて図に表して確認しよう。

読み深めよう

② 本文中では、「学力」が伸びる条件が三つあげられている。それぞれの条件をあげている理由を考えよう。

③ 「学ぶ力」は、「時間的変化のうちにおいてのみ、意味をもつ指標だ」(P 230 L 8)と述べられているが、どのようなことか。「比較」という言葉を用いながら説明しよう。

自分の考えを伝え合おう

④ 筆者の考える「学ぶ力」の伸びる三つの条件を踏まえ、自分の考える「学ぶ力」を話し合って整理しよう。

⑤ 筆者の「主張」に対して、自分の考える「学力」とは何か、読む前と考えが変わったかなど、三百字程度の文章にまとめよう。

言葉・情報

言葉と表現

この文章から、「私は」という言葉を用いている文を抜き出し、「私は」と明示することの意味を考えよう。

断定する表現

……まちがいなく……といえます。(P 229 L 4)

共通点を見つける表現

……同様のものだと思います。(P 229 L 6)

振り返り

- 筆者の述べる事実と主張の関係を捉えているか。
- 論理の展開や表現の効果を考えながら文章を読み、理解したことや考えたことを自分の知識や経験と関連づけ、考えを広げたり深めたりしているか。
- 筆者の主張に対する自分の立場を明確にして、すすんで自分の知識や経験と関連づけてさまざまな文章を読もう。

この教材で学ぶ漢字

229 潜 セン 潜水
ひそむ 森に潜む
もぐる 海に潜る

229 塞 サイ 要塞
ふさぐ 閉塞
穴が塞がる

231 匠 シヨウ 意匠

229 維 イ 維新

230 劣 レツ 劣勢
おとる 性能が劣る

232 墨 ボク 墨汁
すみ 墨をする

